

関ヶ原・義と利

Phase 1 is mightier than Phase 2

永田円了

今からおよそ 400 年前、東西 4 キロ、南北 2 キロの盆地(岐阜県不破郡)で、15 万の軍勢がぶつかり合う、天下分け目の「関ヶ原」の戦いが繰り広げられた。西軍 8 万を率いる石田三成と東軍 7 万の徳川家康、数のうえでは多数を占める西軍だったが、結果は東軍・家康の勝利となった。6 時間という短時間で勝敗が決したこともあり、歴史的にはあまり詳細が語られることはなかった。今回は、司馬遼太郎著『関ヶ原』をベースに、この戦いで繰り広げられた人間模様を紐解きたい。



石田三成 vs. 徳川家康

石田三成は豊臣秀吉の側近として、内政を担当する文知派、今でいえば政治家の第一秘書の役割である。15 歳で秀吉に見出され、それ以来ずっと秀吉の手となり足となって豊臣政権を支える。

一方徳川家康は、250 万石をバックに豊臣五大老の筆頭として、秀吉死後の天下をねらう。この二人の性格はおもしろいほどに正反対なのである。

三成は「義」を重んじる文知派。正義をかざし、秀吉亡き後の豊臣家復興を、秀吉の嫡男 8 歳の秀頼をたてて実現しようとする正統派である。正義は必ず勝つと信じ、不義は悪とする。頭がよく女性にももて、とてもいい人なのである。しかし、この知恵と文才に長けた三成を、武闘派の武将たちはよく思わない。

「自分たちは戦場で命がけで戦っているのに、お前は畳の上でただ報告書を書いて殿に伝えるだけ」と、殺気だつ。今でいう、キャリア組とノンキャリアの対立の構図である。これがそもそも「関ヶ原」合戦の元にあつた対立であつた。



家康は、三成より 18 歳も年上、海千山千も乗り越え、一人ひとりの私利私欲を見抜いていた。ただ単に正義をかざすだけでは人は動かない。人を動かそうと思ったら、“飴”がいる。家康は人間の欲を読むことができたのだ。「関ヶ原」の戦いは、正論のみを振りかざす三成と、周りの空気を読むことができた家康の勝負であつた。



田中角栄

団塊の世代にとって、田中角栄は“スゴイ”の一言で言い表すことができた。新潟の小学校卒の角栄が、東大出で官僚経験のある超エリートの福田赳夫と総理の座をかけて戦い、なんとその座を勝ち取る。スゴイの一言である。

「皆さん、親たちが我々のために汗を流してくれたように、我々も子供のために、もうひと汗を流そうという考えのもとに、理想的な日本が築き上げられるのであります！」角栄の演説はいつもエネルギーに満ち溢れていた。キーワードは、「汗を流す」「おっかさんのため」「子供たちのため」。このコトバに民衆は酔いしれた。

“第一のみち”(民衆の感情)を知り抜いた言動、まさに“タヌキおやじ”家康の戦術と共通するものがある。正義のみを振りかざす三成が、この第一のみち(生きるためには裏表が必要)の発想が少しでもあれば、「関ヶ原」の歴史は変わっていただろう。

<事例 DVD等>

司馬遼太郎著『関ヶ原』上中下 新潮文庫

ドラマ『関ヶ原』1981年、6時間の超大作、30分間に編集

曾野綾子著『善人は、なぜまわりの人を不幸にするのか』祥伝社

「そして田中角栄は首相になった～44年の証言～」BS 2016/12/7

スティーブ・ジョブズ、スタンフォード大学でのスピーチ(2005)、

「Stay hungry, stay foolish」の意味

歌・「季節の中で」松山千春作詞作曲/歌は、五木ひろし&新沼謙治

円了のホームページ: www.enryo.jp

